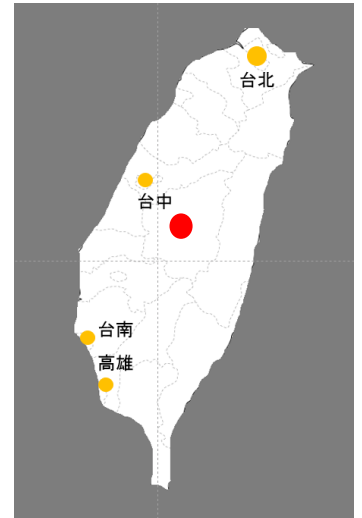


エコロジーを軸に村再生・桃米村

— 「何もない」を逆手に取る

くらし学際研究所・チーム〈近隣アジアを知る〉

垂水英司

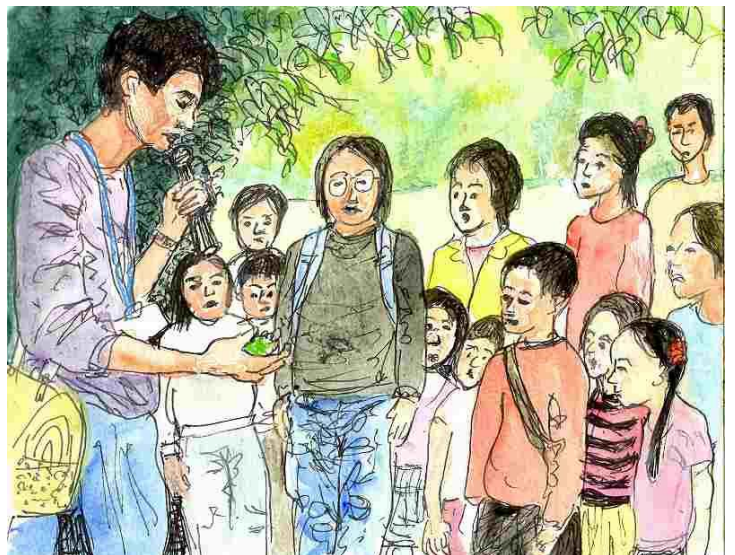


ここは桃米村、南投縣埔里鎮にある小さな農村である。

1人の若い男性がカエルを手に都会からやってきた子供たちに解説している。食い入るように見つめる子供たち。男性は民宿「緑屋」の主人、邱富添さんだ。彼はカエルの生態解説員でもある。

かつて米作りが盛んだった桃米村も、次第に農業は衰退してきた。一時メンマの材料になる麻竹づくりが盛んになったが、やがて価格が下落し、ブームは次第に萎んでいった。

多くの若者たちは、もはや村の将来に希望を見いだせず都会を目指した。邱富添さんも中学を卒業するとすぐに台北にでた。それから16年、紆余曲折を経て小さなタクシー会社を経営するまでになったが、故あって故郷に帰る。その故郷にはもはや老人や子供しか残っていなかった。そのとき921地震が発生した。大きな被害に見舞われた村の姿に茫然とし、都会に戻るべきか思い迷った。しかし、彼は村にとどまった。生態村として桃米を再生しようとする「まちづくり」が始まろうとしていたからだ。彼はその活動に身を投じ、なくてはならない若い働き手になった。



桃米村の民宿「緑屋」の主人、邱富添さん。台北からUターンし、921地震後の生態村づくりに参加した。

桃米村は、921地震によって369戸のうち168戸が全壊し、60戸が半壊した。当時桃米村の黄金俊里長は、近くの町埔里に設立したばかりの「新故郷文教基金会」にまちづくりの支援を求めた。基金会代表の廖嘉展さんは、ジャーナリストやまちづくり活動でキャリアを積んだ後、奥さんの顔新珠さんと共に、埔里を拠点にして草の根まちづくりを推進しようと決意し、新しい組織を立ち上げたばかりだった。

台湾で草の根まちづくりの動きが始まったのは、わが国より15年ほど遅い1980年代の中頃である。それは台湾社会が民主化に向けて歩みだした時期と重なりあっている。郷土や

地域の歴史や文化に関心を寄せる動き、環境破壊に対する反対運動あるいは社会運動、住民参加の試みなど、草の根まちづくりに繋がるさまざまな活動が台湾各地で澎湃として起こった。歴史、文化、社会運動、都市計画とさまざまな切り口で、さまざまな人たちが参入してきた。1990年には社区（コミュニティ）というキーワードが一種のブームになる。そして1994年には、政府も社区を軸にした施策（社区総体營造）を打ち出すこととなった。思えば熱を帯びた時代だった。1962年生まれの廖嘉展さんは震災当時37歳、草の根まちづくりの草創期の人たちの背中を追いながら走り始めた世代といえようか。

桃米村に入った廖嘉展さんは、「下から上へ」計画を積み上げようと村民の参加を求めた。しかし、村民は何もない桃米村の未来を図りかねていた。彼は、何もないのではなく自然があるのではないか、生態村を軸に復興しようと提起した。だが村民の多くは、自然で飯が食えるか、と半信半疑だった。そこで、生物の専門家に村の生態調査を依頼した。結果は、カエル、トンボをはじめ、桃米は台湾でも有数の多様な生物の宝庫であることが分かった。村民に自覚や自信が芽生え始めた。荒れたままだった湿地を、自ら汗を流して生態公園に整備した。そして、カエルやトンボ、植物などの自然の生態を自分たち自身が学んで、訪れる人たちに解説できるようにしよう。こうして生態解説員のトレーニングと認定制度が始まった。少しずつ生態見学にやって来る人たちが増えてきた。そうしたツアー客のために、一つ二つと民宿ができた。こうして「桃米生態村」は最初の一步を踏み出したのである。

「震災は危機だったが、転機でもあった。」と邱富添さんは当時を述懐する。彼は、生態村づくりに参加し、第1期の生態解説員に認定され、いち早く民宿「緑屋」を開設した。私もたびたびお世話になるこの宿に入ると、至る所に飾られたカエルの絵やグッズが迎えてくれる。民宿はその後もどんどんと増え、今では30軒を数える。

「桃米ではカエルが社長です。」という廖嘉展さんは、その後も桃米に関わり続けている。生態村が軌道に乗り出した時点は1幕目に過ぎなかった。2幕目の幕開けは、神戸にあったペーパードームを桃米に移設するプロジェクトだ。私たちとの日台被災地交流の中で力を合わせた。2005年から2008年、移設は3年がかりで苦労の末に実現した。その後「紙経堂」時代に入った桃米村、その活動はさらに広く、深く展開していく。2幕目から数えても既に10年を超えた。

私もこの間、何度桃米を訪ねたことか、数え切れない。最近、邱富添さんや廖嘉展さんに会った時の口癖は、「時間過得真快!」（時の経つのは早いね!）

今年の春、桃米を訪ねて驚いた。廖嘉展さん夫妻は桃米村に自宅と民宿を建てているのだ。私より20歳ほど若い彼らだが、どうやらここに骨を埋めるつもりらしい。



新故郷基金会の廖嘉展・顔新珠夫妻は、921地震後桃米村の支援に入って19年。桃米村に自宅と民宿を建設中だ。